

の著作で述べられている人間の信仰の能力である「宗教意識」は独立したものでなく、単一の人間の意識が宗教を対象とする時には、それを「宗教意識」と呼ぶだけであるとミューラーは指摘する (Max Müller, *Lectures on the Origin and Growth of Religion as Illustrated by the Religions of India*, pp. 21-22)。その論法も、『骸骨』の「心体は固より単一にして心用亦一類なり」(『全集』、五―六頁) という説に近似している。しかしながら、清沢の宗教起源論は基本的には仏教の教理に依拠している。清沢の宗教哲学では我々の世界の全ての存在は「有限」であり、一方、宗教の対象、実践の目的は「無限」である。清沢によれば、我々の靈魂は「発展」できる「一体」として定義され、あらゆる有限は靈魂によって無限に至ることができるものであると主張される。更に、宗教を二つの観点で捉え、有限から見た自力門の世界観と、無限から見た他力門の世界観があると述べている(『全集』巻一、一一―一二頁)。自力門、すなわち自身の修行によって悟りを開くことと、他力門、すなわち阿弥陀の慈悲により自身が救済されることのいずれの方法を通じて、清沢の宗教哲学では人類に備わっている普遍的な宗教、信仰能力の存在が主張されている。そして、清沢はその有限の無限への開発性を説明するに当たって、仏教の人間観、「如来蔵」、「仏性」、「真我」等、人類の普遍的な無限性、開悟性、救済性に基盤を置いている。そうすることによって、清沢はスペンサーの説を否定し、「宗教心」という本能に基づく宗教起源論を主張したと考える。

清沢満之門下の時代意識——雑誌『精神界』を中心に——

春近 敬

晩年の清沢満之(一八六三―一九〇三)と共に「浩々洞」と呼ばれる共同生活を送った晩烏敏(一八七七―一九五四)、多田鼎(一八七五―一九三七)、佐々木月樵(一八七五―一九二六)ら若き仏教青年たちは、一九〇一(明治三十四)年、浩々洞のはじまりと共に創刊された雑誌『精神界』を通じて、時代社会に対する問題関心を発信していた。彼らの思想運動は「精神主義」として世間に喧伝された。

一九〇一年の『精神界』で、清沢の門弟たちは主に次のようなテーマに関心を寄せて言及している。まずは、経済や物質的な価値を至上とする価値観の瀾漫に対する批判である。そして、物質的な価値観に対して、宗教とともに倫理や道德が再び広まることを期待する内容が多く語られる。しかし、一方で倫理という問題に全てを集約させようとする当時の思想的趨勢について危機感をあらわにしている。宗教の領域をも倫理で語ろうとすることに對しては、しばしば強い批判が見受けられる。

精神主義とは相対有限の事物を根拠とせず、絶対無限たる如来にその立脚地を定めることで心の平安を得るという思想であった。社会の中の経済資本や倫理道德はいずれも相対有限のものであるから、いずれはどこかで破綻を来す。それらを依り所としている限りは、迷悶から逃れることはできないという主張である。これが、仏教の社会的意義を考える人たちの批判を招いた。特に境野黄洋、杉村楚人冠らを中心とし、雑誌『新仏教』を出していた新仏教同志会からは、内向きな「病人の宗

教」「羸弱思想」であると指摘された。また、当時の真宗は真俗二諦を前提とする教義であったことから、俗諦をないがしろにするものとして、大谷派宗門内部からも非難された。

このほか、犯罪者教誨や軍事情勢(北清事変や馬蹄銀分捕事件、八甲田山遭難事件、日露問題)などに関する言及もあるが、踏み込んだ発言はあまり見られない。また当時話題となった足尾鉍毒事件については、暁烏などはしばしば田中正造に批判的である。清沢自身は、このような社会の個別の事件について直接コメントすることはほとんどなかった。

いずれにせよ、宗教と倫理道德との関係については、清沢の門弟たちの大きな関心事であった。しかし、清沢が巻頭言である「精神界」欄に書いた文章を一覧してみると、創刊当初の清沢自身は倫理道德について積極的には言及していない。清沢が「精神界」欄に書いた文章は、精神主義の思想の概要、精神主義からみた社会的価値と自由ということがテーマの中心であって、倫理道德については少なくとも最初の一年は語っていない。また、「倫理以上の安慰」「倫理以上の根拠」「宗教的道德(俗諦)と普通道德との交渉」といった、晩年の清沢の倫理道德に関する一連の重要な論考も、暁烏が書いた「精神主義と性情」に対する批判を受けて語られたものである。

雑誌『精神界』に携わった清沢の門弟たちは、経済的・物質的な価値観が優先される状況を憂いていたが、一方で、倫理道德が宗教をも支配するとする風潮に対しても警戒した。しかし宗教と道德との関係については門弟たちの大きなテーマとなり、清沢はそれに要請されて自説を述べた。倫理道德というテ

ーマでなくとも、同誌に掲載された清沢の「精神主義と唯心論」は、精神主義は唯心論であるとの批判に応じたものであり、「精神主義と三世」は、精神主義はアキラメ主義であるとの批判を受けて書かれたものである。そのことから、清沢の晩年の思想の一定の部分は、門弟たちの時代意識や問題関心に「応答する」形で表明されたものであると見ることができる。

近代真宗の法蔵菩薩詮釈に関する一考察

——金子大榮を例に——

陳 敏 齡

金子大榮(金子と略す)は曾我量深(曾我と略す)と共に清沢満之「精神主義」門下の双雄である。金子には曾我ほど直接に法蔵菩薩を専論するものはないが、両者は互いに影響しあう面もあるので、曾我説の特徴に合わせながら、金子の法蔵菩薩解釈を考えたい。

一、金子の「因果一如の法蔵菩薩」説は、曾我の「従果向因」の法蔵菩薩説に対応するためである。一般には法蔵菩薩を「従因向果」の菩薩という。曾我は逆観の角度から特に「従果向因」という「因位」の法蔵菩薩を力説する。ところで、金子は知識の面で曾我の「逆観」説を認める一方、他方で感情(感性)の観点から、「順観」・「逆観」の両方が並存している。金子にとって、人間の感情として、「思い出ほど近いものはない」という実態である。「感情的には、前とか後とかということを決定的でない」という。金子は恐らく華嚴の「永遠の視野」から、「順観」「逆観」のいずれにもとらわれない所で、「因果一